

副詞「まして」の解釈について

—上代から中古へ—

本 田 義 彦

—
万葉集や源氏物語が、文学作品として、世界的にも超一流の作品であることは、誰しも認めるところであろう。しかし、それが単なる学者の研究のための資料として存在するのみならば、その万葉集や源氏物語の芸術的存在価値は無いにも等しいことであろう。万葉集や源氏物語が、芸術的に優れているというのであれば、その専門家だけでなく、一人でも多くの人々が、その芸術的素晴しさを鑑賞できるようにしなければならない。しかも、芸術作品である以上、それは「生」で鑑賞しなければならない。万葉集を口語訳で鑑賞してもそれはほんとうの万葉集の鑑賞にはならない。谷崎潤一郎訳の源氏物語が、いかに名訳であったとしても、それは谷崎源氏であ

って、紫式部の源氏物語ではない。文学作品が「ことばの芸術」である以上、どうしても原文で鑑賞しなければならない。そこに用いられている「ことば」が「表現」が大切なのであって、現代文に訳された場合は、もはや原文とは違った作品になってしまう。しかし残念ながら、千年もの時間的隔たりは、その言葉や表現の面において、それが我々現代人にとっては大きな障害となっているのである。従って、それらの古典を読むためには、どうしても辞典や註釈書類の助けを借りざるを得ないのである。しかし、その辞典や註釈書類に、誤りや不十分なものがあるとすれば、それら万葉集や源氏物語等を正しく鑑賞しようとする者にとっては、かえって障害となってしまうであろう。ところが、現在の辞典や註釈書類には、その誤りや不十分な説明が、かなり多いのである。

従って、万葉集や源氏物語そのものの研究も、もちろん大切で必要なことではあるが、今や辞典や註釈書類の研究や調査も必要な段階に來ているのではあるまいか。辞典や註釈書類の誤りや不十分な説明の一例として、私はここに副詞「まして」をとり上げてみることにしよう。

二

まず、辞典に副詞「まして」がどのように取り上げられているかをみることにしよう。戦前から戦後にかけて、辞典は数多く出版されているが、その中から代表的な、しかもここに説明するに必要な問題をかかえている次の七種の辞典を取り上げることとする。出来るだけそのままとし、一応年代順にかかげることにした。

- ① **大日本国語辞典**（上田万年・松井簡治）富山房 大正四
年刊。

まして 況（副）〔増しての義〕 あるが上にも。なほさら。いはんや。まいて。萬五「瓜はめば子どももほゆ、栗はめば麻斯提（マシ）しぬばゆ」古今離別「秋萩の花をば雨に濡らせども、君をばまして惜しとこそ思へ」枕三「つばないとをかし。はまぢの葉はましてをかし。」

- ② **大言海**（大槻文彦）富山房 昭和七年刊

まして（副）況（勝してノ義）元ヨリアルニ超エテ。ナホサラ。音便ニ、まいて。萬葉集「瓜食メバ子ドモオモホユ、栗食メバ麻斯提シヌバユ」竹取物語「コレオ聞キテ、ましてカクヤ姫聞クベクモアラズ」源氏・桐壺「ソレヨリ下葛ノ更衣タチハ、まして安カラズ」

- ③ **広辞苑** 昭和三〇年刊

まして（況して）（副）〔増して〕の意）（一）あるが上にも。さらに一段と。なおさら。ことさら。万葉「瓜はめば―徳ばゆ」（二）いうまでもなく。勿論。いわんや。源氏・帚木「はかなき事だにかくこそ侍れ。一人の心の時にあたりて気色ばめらん見る目のなさをばえ頼むまじく思う給へて侍る」「平日でも混むのに、一日曜だったものだから大混雑だった」

- ④ **旺文社古語辞典** 昭和四〇年刊

まして〔況して〕（副）（一）いっそう。もっと。「よろしきことだにかかる別れの悲しからぬはなきわざなるを―哀にいふかひなし」（源氏・桐壺）（二）いわんや。いうまでもなく。「（源氏が）ゆゆしう清らなるに、所からは―この世のものとも見え給はず」（源氏・須磨）〓まいて

- ⑤ **岩波古語辞典** 昭和四九年刊

まして(増して・況して)(副)(増シに助詞テがついた形。漢文訓読体では使わない語)(一)なおいっそ。さらに。「瓜食めば子供思ほゆ、栗食めば一徳ばゆ」(万葉)「たたずみ給ふさまのゆゆしう清らなる事、所がらは—この世のものと思え給まず」
「源氏・須磨」(二)いうまでもなく。いわんや。「今日だに(歌ヲ)言ひがたし。—のちにはいかならん」
(土左・一月十八日)

⑥ 日本国語大辞典(小学館)昭和五十年刊

まして(増・況)(副)(動詞「ます(増)」の連用形に助詞「て」が付いてできたもの)・(一)先行する状態よりも程度のはなはだしいさまを表わす語。それ以上に。他のものよりもひどく。今までよりも強く。いっそ。万葉「瓜食めば子供思ほゆ。栗食めば麻斯提偲はゆ(山上憶良)」古今「秋はぎの花をば雨に濡らせども君をばまして惜しとこそ思へ(紀貫之)」源氏・桐壺「我はと思あがり給へる御方方めざましきものにおとしめそねみ給。同じほどそれより下らうの更衣たちはましてやすからず」(一)先行する事象からすれば、それより度の進んだ場合、次のような状態が存するのは当然だ、と判断する気持を表わす語。下に推量、仮定表現を伴うことが多

⑦ 古語大辞典(小学館)昭和五八年刊

い。いわんや。なおさら。言うまでもなく。竹取「それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられんとしけり。まして龍をとらへたらましかば、又こともなく、我は害せられなまし」土左・承平五年一月一日「書けりとも、えよみすえがたかるべし。今日だにいひがたし。ましてのちにはいかならん」
まして(況して)(副)(「まいて」とも)(一)いっそ。なおさらに。もっと。「瓜食めば子供思ほゆ栗食めば—(麻斯提)偲はゆ」(万葉)「よろしき事だに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、—あはれに言ふかひなし」(源氏・桐壺) (二)なおさらのこと。いわんや。「男もならはぬは、いとも心細し。—、女は船底にかしらをつき当てて、ねをのみぞ泣く」(土左・一月九日)「みかどだに婿求め給ふなる世に、—ただ人の盛り過ぎむもあいなし」(源氏・宿木)▼
語註 動詞「ま(増)す」の連用形「まし」に助詞「て」の付いたものが副詞に転成したものである。(一)の用法は「女はまして」のように位置を換えると(二)と近くなる。この用法には漢文訓読文体の影響がある。

右の七種の辞典をみるに、戦後の辞典はすべて③広辞苑以下、用法を(一)に分類しているが、戦前の①大日本国語辞典や②大言海などでは分けていない。③広辞苑を始めとして、(一)に分類した根拠については何も書いてなく、その口訳だけでは充分理解できなかったが、⑥日本国語大辞典が出版されて始めてその根拠が明かにされた。すなはち、

(一) 先行する状態よりも程度のはなはだしいさまを表わす語、

それ以上。他のものよりもひどく。今までよりも強く。いっそう。

(二) 先行する状態からすれば、それより度の進んだ場合、

次のような状態が存するのは当然だ、と判断する気持ちを表わす語。下に推量、仮定表現を伴うことが多い。いわんや。なおさら。言うまでもなく。

右の記述で、(一)と(二)の用法上の相違がはっきり分ったが、それと同時に(一)と(二)に分類する事が誤りであることもまたはっきりしたのである。

私は、副詞「まして」の用法としては、(一)が正しく、(二)は誤り、すなはち(二)だけでよいと思うので、まず(二)の用法から検討してみよう。(二)の用法は、先行する状態と、後行する状態との間に能力等の差がある場合で、た

たとえば「子供にだって出来るのだから、まして大人に出来ない筈はない」というのが基本的用法で、図式すれば次の如くなる。

④ 子供
まして
⑤ 大人
⑥ 出来る

すなはち、④(子供)と⑤(大人)とは同類でその間には能力の差がある訳で、陳述の部分⑥は共通となる。辞典の⑦古語大辞典の(二)の用例を見ても、男と女との間には能力の差があるのである。

「男もならはぬは、いとも心細し。まして女は船底にかしらつき当てて、ねをのみぞ泣く。」(土佐・一月九日)

海がたいそう荒れている場面である。その他の用例もすべて④と⑤とは同類でその間に能力の差がある。

ところが、(一)の説明によると、「単純比較」で、単純に前のものより後のものが程度の甚だしい場合ということになるが、辞典で(一)の用例としてあげてあるものはずべて、単純比較ではなくて、先行する状態と、後行する状態との間には、明かに能力の差があって、(二)の用法と考えられねばならないものばかりである。それで、次に

③広辞苑以下の辞書が、(一)の用例としてあげているものを検討して、それがすべて(二)の用法に該当するものである事を証明することとしよう。④大日本国語辞典と②大言海とは、(一)(二)に区別していないので検討の必要はない。

なお、辞典類をよくみると、いろいろ矛盾する点があるので、まずその点を指摘することにしよう。「辞典口語訳表」をみると、「なおさら」という口語訳が、③広辞苑では(一)に、⑥日本国語大辞典では(二)の口語訳に用いられている。さらに、⑦古語大辞典では、(一)に「なおさらに」、(二)に「なおさらのこと」という口語訳を用いているが、果してどのように違うのであるうか。これらは(一)(二)の分類をなくすれば、自然と解決する矛盾である。

次に「辞典用例表」をみると、まず目につくのは、源氏物語・須磨巻の「ましてこの世の」の用例を、④旺文社古語辞典では(二)の用例、⑤岩波古語辞典では(一)の用例としてあげているが、この矛盾も、(一)(二)に区別しなければ問題はないのである。

さらに、⑤岩波古語辞典では、副詞「まして」について、「漢文訓読体では使わない語」とあり、⑦古語大辞典では「この用法には漢文訓読文体の影響がある。」とある。「この用法」とは(二)の場合をさす、「いわんや」

といったことば、またはそのような考え方には漢文訓読文体の影響があるかも知れないが、副詞「まして」の本質的用法には、漢文訓読文体の影響があるとは考えられない。また⑦古語大辞典では、(二)の用例に「男もならぬは、いとも心細し。まして、女は船底にかしらをつき当てて、ねをのみぞ泣く。」八土佐Vをあげて、「(二)の用法は『女はまして』のように位置を換えると(一)と近くなる。」とあるが、(一)(二)をすべて(二)に統一する私の立場からみれば、問題にはならない。

さて、いよいよ上述五種の辞典が(一)の用例にあげている、その用例を検討しよう。

まず③広辞苑・⑤岩波古語辞典・⑥日本国語大辞典・⑦古語大辞典が採用している万葉集の「瓜はめば」の歌を検討する。

瓜はめば 子供思ほゆ 栗はめば ましてしぬばゆ
いづくより 来たりしものぞ まなかひに もとな
かかりて 安寝しなさぬ(万葉集・八〇二)(山上憶良)
この歌の場合、④は「瓜」で、⑤は「栗」、⑥が「子供を思う」という事になる。当時の瓜は今の奈良漬に用いるような瓜で、今の瓜とは違ってそんなにおいしくなかったそうである。栗は万葉の時代も今もそれほど違いはない。すなはち、余りおいしくない瓜をくっても子供

の事が思いだされるのであるから、まして（言うまでもなく・なおさら）瓜よりおいしい栗をくったら子供の事が思い出される。というのである。（一）の解であれば、単に「瓜にもまして栗を食べると子供の事がしのばれる」という単純比較で、しかも「瓜にもまして」という場合の「まして」は動詞的用法となるが、この「まして」は明かに副詞としての用法であり、㉑と㉒との間に能力ないし程度の差がある（一）の用法というべきである。『万葉集全註釈』では「マシテは、瓜を食うにも増してで、一層」と註しているが、これだと（一）の用法である。『万葉集全釈』では「マシテはそれ以上に・一層といふ意。況んやではない。」と言っているが、むしろ「況んや」でなければならぬ。その他の註釈書でも、副詞「まして」の本質がわかるような説明は見当らない。

次に㉑日本国語大辞典が引用している『古今集』（離別歌・三九七）の用例をみてみよう。

かむなりの壺に召したる日、大御酒おほみきなどたうべて、
雨のいたう降りければ、夕さきまで侍りて、まかり
出で侍りける所に、紀貫之が酒杯さかづきをとりて

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ
思へ

とよめりける返し

兼覧王かみのおほみ

をしむらむ人の心を知らぬまに秋の時雨ときりと身ぞふりに
ける

右の如く、三九七番歌は紀貫之の歌であるが、兼覧王との贈答歌である。この歌の解釈は、たとえば『日本古典文学全集』本によると次の如くである。

ただ今の雨で秋萩の花を濡らしてしまったことも残念でございますが、さて雨が上がったためあなた様とお別れするのは、花をだめにしてしまった以上に残念至極と存じます。

㉑だって㉒だから、まして㉒は㉑だ、というのが、副詞「まして」の用法の基本型である事は前にも一言した。そして㉑と㉒とは同類で能力・程度などに差があり、㉑は共通でなければならぬ。右の解釈によると、㉑は「秋萩の花」、㉒は「あなた」で、㉑は、㉑では「雨に濡れる事」、㉒では「別れる事」となって、㉑の陳述の部分が共通でなくなる。この歌は副詞「まして」の本質的用法からすれば、㉑は「萩の花」、㉒は「君」で宜しいが、㉑は「雨に濡れるのが惜しい」という事でなければならぬ。すなはち、とるに足りない秋萩の花が雨に濡れて駄目になるのだから惜しいのだから、まして（言うまでもなく・なおいっそう）大事なあなたが雨に濡れるのは、惜しい、悔しい事である、という解でなければならぬ。

らない。もちろん、この歌は別れに臨んでよまれたものであるから、あなたと別れるのが惜しいというのが動機となっており、またその意も含まれてはいるが、言わんとする所は、あなたが雨にぬれる事が残念だ、と解すべきである。そして「雨に濡れる」という事には、兼覧王が不遇である事を寓しているのである。「兼覧王は、藤原氏に疎まれ不遇をかこたれた惟喬親王の皇子。そこから五九七は兼覧王の沈淪を同族の紀貫之がなぐさめた歌。五九八は兼覧王がそれに応えた歌、と解する説もある。しかし贈答された場が他ならぬ内裏での行爲であるから、政治向きに露骨な解釈は不適當である。」と『新潮日本古典集成』本にはあるが、それほど露骨な表現とも思われたいし、それとなく慰められたのだと解したい。とにかく、副詞「まして」の用法からは、前述のような一般の註釈書の解釈は誤りである。なお、◎を「惜しい」で統一すると、㉔が秋萩の花が雨に濡れる事、㉕君と別れる事、となつて、㉔と㉕とが異質のものとなつてしまう。また、君は実際には雨に濡れていないのかも知れないが、そのように見立てる事は、古今集では珍しい事ではないし、少し理屈っぽくなるが、夕方まで待っても雨がやまず、雨の中を帰って行ったのかも知れない。(牛車だろうから、濡れて帰る訳ではあるまいが、「雨のい

たう降りければ」とあるので、その乗り下りに多少は濡れる事であろう。) (この古今集の歌の解については、別の機会に詳しく取りあげたいと思う。)

次は㉔日本国語大辞典引用の、源氏物語・桐壺巻の「ましてやすからず」の例である。

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず。

これは、有名な源氏物語の冒頭の文で、㉔は「女御」、㉕は「更衣」、◎は「めざましきものにおとしめたまふ(やすからず)」となる。すなはち、身分が高くて、たか一人の更衣が帝のご寵愛を受けたとしても、それほど心配の必要もない女御方まで心をいらだたせざるのであるから、その地位が女御ほど安定していない身分の低い更衣たちはまして安心ならない、という意である。女御と更衣の間には身分の差があつて単純比較ではなく、(二)の用法というべきである。なお『日本古典文学大系』では、「御方々」を「女御・更衣」と解しているが、それは誤りで、女御方でなければならぬし「まして」の

解釈についても「上臈の、女御や更衣にも増して、気が
気でない。」と、副詞「まして」を動詞的に訳している。
『源氏物語評釈』（玉上琢弥）でも「女御がた以上に気が
気でない」と訳しており、その他の註釈でも、副詞「ま
して」の本質をとらえた解釈・説明は見当らない。

次は④旺文社古語辞典と⑦古語大辞典とが引用してい
る源氏物語・桐壺巻の「ましてあはれに」である。

皇子は、かくてもいと御覽ぜまほしけれど、かかる
ほどにさぶらひたまふ例なきことなれば、まかでた
まひなむとす。——中略——よろしきことにだに、
かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、まして
あはれに言ふかひなし。

この場面は、光源氏三歳の夏、母桐壺更衣が亡くなった
ので、その喪に服するために、源氏が宮中より里邸に退
出しようとしている場面である。

さて、ここで④は「よろしきこと」であり、⑤は「か
かる別れの悲しからぬはなきわざなる」であるが、⑥に
相当する部分は省略されている。しかし④が「よろしき
こと」であるから、⑥は「あしきこと」であることは分
る。ただし、その「よろしきこと」「あしきこと」とは
具体的にどんな事か、また「かかる別れ」とはどんな事
実をさすのか、と言った点については諸説があって、可

成り複雑になっているが、その詳細については、「源氏
物語存疑『かかる別れ』考」と題して、『九州大谷国文』
第十五号（昭和六十一年七月刊）に発表しておいたので、
ここでは、その結論に基いて「まして」の説明をするこ
とにしよう。

④の「よろしきこと」とは、この場合「生別」の事
あり、従って⑥は「死別」という事になる。「かかる別
れ」とは「親子の別れ」であるが、この場合は「母と子
との死別」ということになる。すなわち、親子の別れは
生きていての別れでも悲しくないことはないのに、この
場合は母と子との死別であるのでまして悲しい事で、誠
に気の毒で何と言っても甲斐のないことである、という
事になる。⑥「あしきこと」が省略され、その④に相当
する部分「悲し」も省略されて「あはれに言ふかひな
し」となっているの、いささか分りにくくなっている。
「あはれに言ふかひなし」は、周囲の者が母親と死
別した幼い源氏に寄せる同情の言葉である。

この例も④「よろしきこと（生別）」と、⑥「あしきこ
と（死別）」との間に度合の差があって、当然②の用例で
なければならぬ。『日本古典文学大系』本では「普通
の親子の別れにもまさって」と単純比較で、動詞的解釈
となっている。他の諸註釈書も副詞「まして」の本質に

基いた説明にはふれていない。

最後に、源氏物語・須磨卷の「ましてこの世の」の例であるが、これは④旺文社古語辞典では(一)、⑤岩波古語辞典では(一)の用例にあげている。(一)(二)の用法に分類すれば、どちらかが誤りということになるが、前述したように(一)(二)に分類すること自体が誤りであるから、問題はな

い。

前裁の花いろいろ咲き乱れ、おもしろき夕暮に、海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふさまの、ゆゆしうきよらなること、所がらはましてこの世のものと思えたまはず。

この例では、④は省略され、⑤が「所がら」であり、③は「ゆゆしうきよらなること」「この世のものと思えたまはず」となる。「所がら」について、『源氏物語評釈』（玉上琢弥）では、「閑寂な所なので、風景のよい所として、という説もあるが、須磨をよい所と思っていたのではないから、こんなひどい所、貴人のおるべきでない所、と解する。」とある。私も同意見なので、⑤「所がら」に対する④は「こんなひどい所ではない所」で、具体的には「都」とでもいった所をさす。すなはち、源氏は、都においても「ゆゆしうきよらなること」「この世のものと思えたまはず」なかったが、こんなひどい所なの

でまして……ということになり、④と⑤との間に格差があつて(二)の用例といふべきである。『日本古典文学大系』本では「俗界にまして」とあるが、これだと副詞「まして」を動詞的に訳したことになって宜しくない。なお他の註釈書類でも、副詞「まして」の本質にふれたものはない。

以上、前述五種の辞典に引用された用法(一)の用例を検討したが、何れも用法(二)に相当するものばかりで、用法(一)は不必要であることが証明されたと思う。ただ口訳としては(二)の方の「いうまでもなく」とか、「いわんや」の方が誤解が少いと思うが、それにしても、④や⑤または③の省略などがあつて、口訳には注意を要する。(一)の口訳「いっそう」「なおさら」等でもかまわないが、その場合でも④だつて③だから「なおさら」⑤では③だ、という意がよく分るように口訳または説明をする必要がある。

三

以上で辞典に対する批判を終つたので、次に万葉集の用例を検討してみる事にしよう。『万葉集総索引』（正宗敦夫編）の「まして」の項を引くと、次の七例があげてある。

三八二・八〇二・一一〇二・一六二九・二三三七・

二三九二・二五五三

このうち、八〇二「瓜はめば」はすでに辞典の場合にとりあげたここでは省略するが、辞典では用法(一)の用例にあげていたが、用法(二)に該当することは前述の通りである。次に問題になる歌からとりあげてみよう。まず二二〇二番の歌。

荒磯ゆもまして思へか玉の浦の離れ小島の夢にし見
ゆる(第一期・古歌集)

第二句を「まして思へや」と読む説もあるが、今は問題にならない。『万葉集全註釈』の口語訳によると「荒磯よりも一層思うゆえか、玉の浦の離れ小島が夢に見えることだ。」とあって、この歌の「まして」は明らかに動詞「まし」である。『万葉集全註』の語註では「益而は久利波米婆麻斯提斯農波由(八〇二)」とあるように、より以上にの意である」とあるが、前述の通り、八〇二の歌は副詞「まして」であって、この歌の「動詞まし+助詞て」と同じではない。次は二三九二番の歌。

なかなかに不見有徒相見恋しき心まして思ほゆ(第二期・人麻呂歌集)

この歌、第二・三句により方の異動があつて、①「見ざりしよりも(は)相見ては」とか、②「見ずあらしを

相見てゆ」とかの読み方があるが、①の訳としては「かえって逢わなかったよりも逢ってからは、恋しい心が増さって思われる。」(万葉集全註釈)となり、②の訳としては「いっそ逢はないであらうものを。相見てから恋しい心がその以前にも増して思はれる」(万葉集全註釈)となり、何れにしろ「恋しき心」が主語で、「まして」の「まし」は動詞となっている。しかし、この表現のうらには「逢わない時も恋しくて仕方がなかったのだから、まして逢ってからは恋しくて仕方がない。」という副詞「まして」の用法になりかねない気持がよみとれる。これは「まして」が動詞から副詞へと独立する過渡的用法といえるかも知れない。ちなみに源氏物語では、動詞「まし」+助詞「て」の「まして」は一例もない。現代では「昨日にもまして今日は混雑した。」という風に動詞としての使用もある。次は二三三七番の歌(第二期・作者年代不明)。

小竹の葉にはだれ零り覆ひ消なばかも忘れむといへば
まして念ほゆ。

この歌は第二句までは序詞で「私の命が消えてしまったならばあなたを忘れもしませう、といふので、いよいよその人の事が思はれる。」(万葉集全註釈)という意で、④は省略されていて、⑤は「消なばかも忘れむ」と言った

こと、◎は「(恋しく)思ほゆ」となる。Ⓐは「消なば
かも忘れむ」という前をさして、「消なばかも忘れむ」
などと言う前にも恋しく思っていたが、そんな殊勝な事
を言うので、まして恋しく思われる、と解すべきであ
る。ただし、諸註釈書とも、副詞「まして」の本質が分
るような説明にはふれていない。なおこの歌の「まし」
も動詞ととれない事はなく、副詞「まして」に転成する
過渡的なものかも知れない。次は同じく第二期の作者年
代不明の歌三五五三番。

夢のみに見てすらここだ恋ふる吾は現に見てはまし
ていかならむ

この用例は、副詞「まして」の最も典型的な例で、説明
の必要もないが、『新潮日本古典集成』本では「まして
―思いが増して、の意」と註しているが、これだと動詞
になってしまふ。Ⓐは「夢」、Ⓑは「現」、◎は「恋ふ
る」で、Ⓐと◎との間には格差があつて、単純比較では
ない。

残りの二首は何れも第四期の歌で長歌である。紙数の
都合もあるので出来るだけ簡単に説明しよう。まず三八
二番の歌で、作者は丹比国人。

……神代より 人の言ひつき 国見する 筑波の山
を 冬ごもり 時じき時と 見ずて行かば まして

恋しみ 雪消する 山道すらを なづみぞわが来る
この歌は、丹比国人が筑波山に登った時の歌で、Ⓐに当
る部分が明瞭簡潔に表現されていないのでいささか分り
難いが、Ⓐ「遠くにあつて思っていた時も」筑波の山は
◎「恋しかったのに」、Ⓑ「近くに來ながら登らなかつ
たら」まして◎「恋しく思う事だろう。」と言う事にな
る。『万葉集全註釈』では「マシテは現在にも益して」
とあるが、これでは動詞的解釈になってしまう。その他
副詞「まして」の本質をついた説明のある註釈書はな
い。

最後の例は一六二九番の歌で、大伴家持が坂上大嬢に
贈った歌である。

…… うつせみの 人なる我や 何すとか 一日一
夜も 離り居て 嘆き恋ふらむ ここ思へば 胸こ
そ痛め そ故に 心なぐやと 高圓の 山にも野
にも うち行きて 遊び行けども 花のみ にほひ
てあれば 見る毎に まして思ほゆ……

この歌は、Ⓐ「山野を行かなかつた時も」◎「恋しくて
たまらなかつた」が、Ⓑ「山野を歩いてみると」花ばか
りがきれいに咲いて、その花に恋人を思いよそえられる
ので、まして◎「恋しく思われる」と言うのである。単
的な表現でないで、Ⓐ◎の關係がいささか分りにく

くなっている。諸註釈書とも、副詞「まして」の本質を説明したものはない。

以上、万葉集の「まして」の用例七首をみてきた訳であるが、二首は動詞であるので、副詞の「まして」は五首ということになる。さらに四首は第二期の歌でその二首は、動詞、他の二首は副詞で、用例がすくないうらみはあるが、第二期の頃に動詞から副詞「まして」が転成されたのではあるまいか。

四

次に、平安時代の主要作品とその副詞「まして」の用例数をあげると、次の如くである。(音便「まいて」をも含む。)

竹取物語	2	古今集	1	土佐日記	3
伊勢物語	1	大和物語	0	蜻蛉日記	40
宇津保物語	77	落窪物語	21	枕草子	58
和泉式部日記	4	紫式部日記	10	源氏物語	
316 狭衣物語	107				

全部をとりあげる余裕はないが、その用例をみるに、すべて辞典でいう用法(一)に該当するものばかりで、(二)の単純比較とみなければならぬ用例は一例もない。いろいろ面白い用例もたくさんあるけれど、平安時代の用例と

しては、辞典の項で源氏物語の用例を三例とりあげたので、紙数の制限もあるし、すでに副詞「まして」の本質についても理解して載いたと思うので、これ以上は取り上げない。(なお源氏物語の副詞「まして」については、六十一年度の『九州大谷学術紀要』第十三号に掲載の予定)

以上を総合するに、始めにも一言したように、辞典や註釈書類には、誤りや不十分な点が相当にあると考えなければならぬ。処で万葉集や源氏物語のような芸術作品は、その専門家の学者だけでなく、一人でも多くの一般の人々が鑑賞してこそ、始めてその芸術的価値は生きてくるものである。文学は「ことば」の芸術であるから、古典といえども原文で鑑賞しなければならない。そのためには、どうしても辞典や註釈書類が必要であるので、一日も早く、誤りのない完全な辞典や註釈書類の出現を望んでやまない。ここに副詞「まして」を例として、その点を強く要望しておきたい。

この稿は、昭和六十一年五月十日、熊本女子大学における「上代文学会」の公開講演でお話したものを、論文風書き改めたものである。

(昭和六十一年八月二十日記)